

古文学習の魅力

今回の学習のポイント

- ① 身近にある古文
- ② 古文とは何時代の言葉？

身近にある古文

昔話の「かぐや姫」を知っている人は多いと思います。これは、「竹取物語」という、平安時代に成立した作品が元になっています。また、小倉百人一首のカルタ取りをしたことがある人もいると思います。「小倉百人一首」は、藤原定家が古典の秀歌の中から選んだものです。

このように意識して眺めてみると、知らないうちに、古文の世界は私たちの周囲にあることがわかります。古文は、現代の私たちの生活や文化に受け継がれているものなのです。

古文とは何時代の言葉？

古文とは、古くは「万葉集」や「古今集」から、近くは「奥の細道」や「東海道中膝栗毛」など、奈良時代から江戸時代までの作品を指します。

古文の作品中に用いられる文法や表記については、平安時代にほぼ成立しており、変化はあるものの、平安時代の用法が基本として用いられています。つまり、古文は平安時代ごろの言葉で書かれているということができます。

■歌の大意

しのぶれど 色にいでにけり わが恋は 物や思ふと 人のとふまで

【大意】

じつと包み隠していたけれど、とうとう顔色に表れてしまったのだなあ、私の恋は。「もの思いをしているのか」と人が尋ねるほどに。

【発展】

平兼盛の「しのぶれど 色にいでにけり わが恋は 物や思ふと 人のとふまで」という歌は、天徳内裏歌合という歌合で詠まれた歌です。（歌合とは、和歌を詠む人を左右二組にわけ、その詠んだ歌の優劣を争う会のことです。）

国語監修・執筆

鈴木周太

この歌合とき、相手方の壬生忠見は、「恋すてふわが名はまだき立ちにけり人
知れずこそ思ひそめしか」という歌を詠みました。両者甲乙つけがたく、判定者
も判定することがなかなかできなかったという逸話があります。
百人一首でも、この両歌を並べて配列しています。古来、忍ぶ恋の歌の双璧を
なすものと言われています。

恋すてふ わが名はまだき 立ちにけり 人知れずこそ 思ひそめしか

【大意】

恋をしているという私のうわさはもう早くも広まってしまったなあ。誰にも知
られないようにとひそかに恋し始めたばかりだというのに。

まとめ

古文に表れる心情表現や考えは、現代の私たちに通じるものもあれば、わかり
にくいものもあります。しかし、古文に親しむことで、もの見方が広がったり
考え方が深まったりします。現代に生きる私たちと、古文の世界は断絶している
わけではありません。古文に親しむことを通して、今生きている私たちの世界を
もっと知ることができるのです。